作文部門[中学生の部]

作文部門受賞者

静岡県議会議長賞

命の境界線を越えて

二年 大石歩実

小学生の頃、犬が少し苦手だった。

我が家には「大吉」と名付けられたチワワがいた。私は三人姉妹の次女だが、長女が生まれる前から家族の一員として、当たり前のように存在していた。けれど、私も、姉も妹も大吉が好きではなかった。私たちには吠えたり、ときには噛みついたりしてくるのに、母や祖母には尻尾を振るからだ。

私も小学五年生ぐらいになると、祖母が出かけているときに餌をあげられるくらいの関係を築くことはできた。姉と妹はまだまだ苦手意識があるようだったが、これを期に姉妹たちとも仲良くなってほしいな、なんて呑気に考えていた。けれど、大吉はもう高齢で、病院に行く回数が次第に増えていった。

その日、学校から帰ると、玄関先で祖母が静かに泣いていた。目を赤く腫らした祖母はいつもとどこか違って見えた。そのとき、私は何も聞かなくても悟った。「あ、大吉が死んじゃったんだ。」と。

大吉はいつものクッションに横になっていて、ちょんとつけば今にも動き出しそうだった。なのに、開いたままの眼には私はうつらなかったようだ。真っ黒な私と同じ瞳は光がなかった。私は初めて「目が光を失う」という言葉の意を知った。

私は大吉の首のあたりに手を伸ばした。やっぱり噛みつかれなくて、複雑な気分だった。驚いた。とても冷たかった。その冷たさに触れたとき、やっと私はもう大吉はいないのだと理解した。

私は読書が好きで、本の中では「死」は何度も登場する。誰かが死んだり、別れを経験したりするたびに登場人物に寄り添ってきたつもりだった。でも、本の中の死と、大吉の死は全く違った。現実は、想像よりも静かで寂しく、冷たいものだった。

あの日以来、私は動物の命について深く考えるようになった。世界には、人間の勝手な都合で捨てられ、愛されず、一度も撫でられることもなく冷たい部屋で命を終える動物たちがいるという事実に、胸が痛んだ。大吉はたしかに私には厳しかった。でも、母や祖母にとっては大切な存在だった。いや、私にとってもきっとそうだったのだ。噛まれても、吠えられても、そこにいてくれた。生きて、呼吸して、感情を持っていた。それは大吉だけではなく、どんな動物にも心があり、命がある。人間の都合でその命を奪うことが、どれだけ理不尽なことなのか。命に優劣はないのに、「動物だから」と境界線を引いてしまっているのかもしれない。

冷たくなった大吉の体に触れたあのとき、私は命の重さを知った。その冷たさは、今でも私の記憶の奥深くに根付いている。私は心の中で、〝君が教えてくれたこと、忘れないよ〟と、そっと伝えた。